

第7回 新鋭俳句賞  
候補作品集

2023. 10

公益社団法人 俳人協会

第7回「新鋭俳句賞」候補者一覧 2023.10.22

番号	題	俳号	所属結社	会員非会員	男女	年齢	都道府県
11	けむり	若杉 朋哉	なし	会員	男	48	埼玉県
14	ふりがな	草子洗	田	会員	女	48	大分県
20	掌中	平野 山斗士	田	会員	男	41	東京都
25	吹かれても	森 雅紀	ひいらぎ	会員	男	46	静岡県
32	色ある景色	吉田 哲二	阿吽	会員	男	43	東京都
45	埜の闇 (とやのやみ)	塚本 櫻魚	蒼海	会員	男	23	茨城県
56	雀の子	高勢 祥子	街	会員	女	46	神奈川県
63	三面鏡	常原 拓	秋草	非会員	男	43	兵庫県
69	名前	黒川 梓	なし	非会員	女	39	東京都
73	無題	六車 佳奈	風土	非会員	女	41	大阪府
81	舵を取る	稲畑 航平	知音 いつき組	非会員	男	40	秋田県
84	楔	織田 亮太郎	銀化	会員	男	35	新潟県

第7回 新鋭俳句賞 候補作品集

【目次】 作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとしてあります。

84	81	73	69	63	56	45	32	25	20	14	11	受付番号
楔	舵を取る	無題	名前	三面鏡	雀の子	時の闇(とやのやみ)	色ある景色	吹かれても	掌中	ふりがな	けむり	題
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	頁

けむり

- 1 風来ては走るくぼみや春の水
- 2 早春の入江の蟹は小さくて
- 3 春焚火煙少なくなりて消ゆ
- 4 雛あられ揺すれば色の出て来たる
- 5 埃立つところ上がる蝶々かな
- 6 こぼれたるちりめんじやこや目のそぞろ
- 7 しやぼん玉空を弾んでゆくところ
- 8 砂にまみれし防風の摘み残し
- 9 万緑の中の日ざしの生きてをり
- 10 竹落葉回りながらにして迅し
- 11 日当れる枇杷の袋は新聞紙
- 12 強さうに日焼してゐる子供かな
- 13 打水に上がる埃は少しきり
- 14 一つ来て二つとなりぬ蠅親し
- 15 網戸から向ふの網戸見えてをり
- 16 テキサスの土産といふは夏帽子
- 17 野次る口西瓜の種を飛ばす口
- 18 枝豆に大きな塩のついてゐし
- 19 秋風のはじめと思ふ風の中
- 20 とりどりに草の実ありて皆小さし
- 21 秋日和山に大声出してをり
- 22 二つ鳴く虫の遠くの方止みて
- 23 短日やもの白つぼく青つぼく
- 24 冬田道曲がるところの見えてゐて
- 25 舞うてゐし落葉はもとの日だまりに
- 26 少しずつくべて昼より長焚火
- 27 焼箸を割つて煙のやうに湯気
- 28 炬燵よりふやけて外に出てゐたり
- 29 クリスマスツリーよろよろ運ばれ来
- 30 少し出て日向ぼこりをして入る

- 1 大空の遠のいてゆく野焼かな
- 2 春愁のため息やがて深呼吸
- 3 伝言が畑を通る木の芽時
- 4 後ろにも母のこでまりあふれけり
- 5 新しき客船と会ふ鳥の恋
- 6 自転車のかごが風切る清和かな
- 7 たけのこを掘りあててゐる誕生日
- 8 走馬灯仮面ライダー駆けつづけ
- 9 父の日の皿にペガサス飛びにけり
- 10 地球儀とおなじ大きき夏の月
- 11 をとこひとり香水の香に埋もれさす
- 12 あめんぼへかがみ水輪も傘の中
- 13 冷酒を啜りてよりの休暇かな
- 14 打水の触れゆく一会ありにけり
- 15 緘の字をぴりりと開く扇風機
- 16 フルートの音にはじまる夕涼み
- 17 出会ふ鳥みな眼白なる一日かな
- 18 ふりがなに心やすらぐ葛の花
- 19 蟪蛄が飛ぶきらきらとひらひらと
- 20 産みたての卵と歩む秋日傘
- 21 走り蕎麦師弟の距離に変はりなく
- 22 噴煙に雨阿蘇山に秋の雨
- 23 秋晴や地図をひろげる指二本
- 24 腰の鈴きれいにひびくきのこ狩
- 25 口紅が紅茶としやべる秋日和
- 26 戻る家変はる旅なり柚子実る
- 27 ちからこぶ見せて注連縄作りかな
- 28 北風の僧侶を運ぶスクーター
- 29 友のまま手袋のまま手を繋ぎ
- 30 遠山の透きとほるまで水柱かな

- 1 紫陽花をもて固めたる街の角
- 2 真昼間の昏がり枇杷のほのあかり
- 3 一行の皆触れてゆく蛇莓
- 4 箱庭や午後の日脚のしみわたり
- 5 復元の古墳を孜孜と草刈機
- 6 味爽の草を素足に踏み進む
- 7 浜砂に生ひ葉耳の退屈す
- 8 炎天下一本道をはぐれけり
- 9 天上に雲の畝あり処暑の村
- 10 颱風に飛沫く大道跨ぎ越す
- 11 馬鈴薯の粗金めける重さかな
- 12 昼の虫右も左も阿弥陀仏
- 13 島青み雲青み鳥渡るなり
- 14 人外の地なる蔓梅擬かな
- 15 逆光に炎立つべし冬紅葉
- 16 山茶花のましろに地の面よごすなり
- 17 棒一本友に涸川渡りけり
- 18 北風や威しの凧が畑の上
- 19 三枚の大皿を据ゑ年忘
- 20 又一つ電球切れて二日なり
- 21 潮騒を見詰め水仙暮れ残る
- 22 道知らず立春に突き当りけり
- 23 げんげ田を深深と割る轍かな
- 24 あたたかや洗車の飛沫頬に来る
- 25 なかぞらを星屑のごと飛花過ぎぬ
- 26 一房の落花の抓みごころかな
- 27 清明や蘇鉄ゆたかに安房の国
- 28 走り根の踏まれ踏まれて風光る
- 29 遙か来ていま鶯の聴きどころ
- 30 掌中の石と別れぬ春の湖

吹かれても

- 1 万葉の字余りゆたか梅の花
- 2 朝食の声に張りあり受験生
- 3 手を上げしのみの出立受験生
- 4 卒業歌ピアノも翼広げけり
- 5 石鱈玉顧みられぬ高さまで
- 6 藁も墓標も所狭きかな
- 7 尾根に退くときも急がず春の雲
- 8 筥の切先かくもやはらかき
- 9 青梅雨や髭剃るときは息止めて
- 10 書斎まで近づいてくる素足かな
- 11 大方は死者の書物や梅雨深し
- 12 解体の三和土を打てる夕立かな
- 13 杭にシャツかけて裸の仁王立ち
- 14 吹かれても吹かれても木へ夏の蝶
- 15 睡蓮に落ちかねてゐる羽毛かな
- 16 雨音を立てぬ朽木や今朝の秋
- 17 一雨に萎れし造花秋祭
- 18 住み込んで学ぶ異国語青蜜柑
- 19 つままれてうりざね顔の蟻蛸かな
- 20 思ひ出すかに蜻蛉の折り返す
- 21 墓地の名で呼ぶ公園や秋の風
- 22 次郎柿家紋のごとき帯広げ
- 23 オルゴール館の時報や秋惜む
- 24 脇締めて枯蠅の対峙かな
- 25 大玻璃に出口なき空冬の蜂
- 26 まだ形あるものの脚煤払
- 27 ちぢこまる句帳の文字や大寒波
- 28 マスクして雪女郎とは思はれず
- 29 寒鯉や漣に雲揺れどほし
- 30 流れゆくままに紅失せ冬の雲

色ある景色

- 1 立春の大きく騰がる馬の脚
- 2 点されて法灯となる春の宵
- 3 番虻とまりて笹の葉を揺らす
- 4 春の鴨一羽来一羽遠ざかり
- 5 クローバーの中に拭きたる泥の靴
- 6 焼印を最後に押して巣箱成る
- 7 毛刈られし羊のたまるひとところ
- 8 盃の縁の薄さよ遅桜
- 9 包帯を取り替ふる間の夕立かな
- 10 百合置いて卓の重心傾きぬ
- 11 蛞蝓や舌のごとくに供花濡れ
- 12 後朝の夏掛そつけないき温み
- 13 暑氣払ひジョッキの取つ手頼もしき
- 14 晩夏光浴びて牛馬の輝ける
- 15 一生を踊り通しし鼻緒かな
- 16 唇をめり込ませ桃喰ひにけり
- 17 椋鳥の群うねりて次の木を閲す
- 18 曼珠沙華重なり合うて疎なりけり
- 19 かはらけを投げて仕舞ひや村祭
- 20 こだまして秋天暮色鳶の涙
- 21 家並みは小祠に途切れ石露の花
- 22 釣り銭は前掛けの中八手咲く
- 23 掌に乗せれば河豚は山睨み
- 24 冬の蚊を潰して点にして捨つる
- 25 どの鳩も冬日に遊び脚真つ赤
- 26 長靴の中の寒さへ足を入れる
- 27 毘掛けし手を一心に洗ひけり
- 28 凍鯉の目線合はせぬやうに群る
- 29 頷きて耳袋また着くるなり
- 30 都鳥色ある景色ここで尽く



- 1 動かざる辻占のゐて夕立来る
- 2 南風に干す寝袋や火の匂ふ
- 3 藻の花や湖のおもてを遅く流る
- 4 水練のこゑ火葬場の裏手より
- 5 街灼くる点字に影のありにけり
- 6 だれひとり降りぬ駅あり遠花火
- 7 電柱の明滅しるし案山子佇つ
- 8 工場のぼけつと建ちぬ踊の夜
- 9 燈籠の列ぶる橋の辰めきぬ
- 10 庭隅に散髪のと虫の声
- 11 薄穂やしどろの風の馴れなれし
- 12 身に沁むやヒポポタマスの眼の小さ
- 13 瞬きに活字のだれる狗尾草
- 14 白風に妖言をくちうつす
- 15 読みきれぬ駅広告や台風圏
- 16 地上絵のごと秋雲をみてをりぬ
- 17 退色の木々黒々と鳥渡る
- 18 涸れ井戸は大口をあけ叢時雨
- 19 狡る休みして冬山に樵る音
- 20 休学の机つめたき紙あふれ
- 21 寒泉やこのひだまりを解きたし
- 22 棹石にうすき氷のおとずれぬ
- 23 耕や岩にもどれる石碑あり
- 24 どつぶりと見得切るとき春の山
- 25 ふらここや交互に空を滑りおち
- 26 薬や龍の涎で洗ふ銭
- 27 痒きほど蜂蜜あまし春の闇
- 28 新道の橋に名の付くいぬめぐり
- 29 トンネルに幾重の時報花の雨
- 30 暮の春おもき闇ある時の奥

雀の子

- 1 梅雨明けの掌に乗る達磨かな
- 2 洗ひたる髪を鎖骨の辺に絞る
- 3 接点を窪ませてゐる水馬
- 4 額の花一枚づつが胸鱗に
- 5 白鷺の脚二等辺三角形
- 6 椰子の木と並ぶ高さに鯉幟
- 7 暗幕を引くとかなぶん付いて来し
- 8 ガスタンクに振ぢれし梯子麦の秋
- 9 夏休み蕎麦屋に父を問詰めて
- 10 手花火の先や背鱗の浮かびゐる
- 11 新涼や顔を描くに十字から
- 12 観音も熊も彫りし刃涼新た
- 13 露草の小さき鎌首擡げゐる
- 14 首都高の灯火づたひに秋時雨
- 15 流星に帰巢本能ある如し
- 16 踏切が下りれば遅刻冬堇
- 17 冬帽の一行セルフうどん店
- 18 パエリアは花のやうなり冬灯
- 19 次次と大縄飛を出で来たる
- 20 春雨や出勤までのルーティーン
- 21 硝子戸にテープ一本春の虹
- 22 春宵や塩茹で肉の薄紅
- 23 途中から絵巻に入りぬ雀の子
- 24 鼻先の春蚊追ひやる空気ごと
- 25 山藤の径や厩舎へ突き当る
- 26 根付ほど小さき蛙を指先に
- 27 ピカソ館囲む木の芽の沸沸と
- 28 苜蓿の湿りを肘に身を起こす
- 29 二重唱浜昼顔の間より
- 30 国道を潜りて夏の浜に出づ

- 1 立像は手から滅びぬ夏の蝶
- 2 百合の首もたげて筑摩文庫かな
- 3 草刈女草のほひを脱ぎにけり
- 4 とうすみや三角に折る廁紙
- 5 古き書によき値つきたり氷水
- 6 夏雲と思ふかたちになりけり
- 7 馬冷す天文台のよく見えて
- 8 遠雷の三面鏡にとどきをり
- 9 一枝より夜のはじまる百日紅
- 10 無花果にとぎれとぎれの眠りかな
- 11 おほかたは矩形の蕾龍彦忌
- 12 秋日傘みぢかき橋をくぐりをり
- 13 秋風や横向く指名手配犯
- 14 文士みなよき髭をもつ烏瓜
- 15 しまはれて案山子のうへの案山子かな
- 16 ことごとく譜面よごして秋収
- 17 牛カツの赤き断面浮寝鳥
- 18 一斉に鳩は左へ七五三
- 19 大根干す縁に伏せある罪と罰
- 20 切干や学生服の丈詰めて
- 21 読めぬ本読まぬ本あり冬の水
- 22 ひと跳ねのあと凍鶴となりけり
- 23 川魚を甘く煮てをる霰かな
- 24 卒業のカーブミラーに大き鳥
- 25 一本は長き雨傘紫木蓮
- 26 じゃんけんはグーではじまる春田道
- 27 唾吐きし少年兵の青き踏む
- 28 喪の家に届く鮫桶養花天
- 29 貝寄風に回す金庫の数字かな
- 30 花冷の南京錠を閉ぢにけり

- 1 過ぎながら傘の傾く二月かな
- 2 むつごとのやう鶯をまね合へば
- 3 風船のゴムの苦きを愛しめり
- 4 マヨネーズみるみる春キャベツ汚す
- 5 たんぽぽに顔の平たき犬坐る
- 6 剪定の音ばかりにて見えぬ人
- 7 ばら園の薔薇ことごとく女の名
- 8 父の日の耳うらがへす遊びかな
- 9 からつゆや音なく月を歩む人
- 10 短夜の貝やはらかに砂を食む
- 11 たまさかに幌は揺れゐて串の鮎
- 12 涼しさや川の名の断つ等高線
- 13 石ひとつ据ゑ箱庭のよるべなき
- 14 ときどきは生者の声す夏館
- 15 本塁を遠く睨みて裸なる
- 16 晩夏光犬ずんと水へ入る
- 17 盆東風や辣油数滴触れ浮く酢
- 18 花木槿いみじき関が壁隣
- 19 齒の傍に檸檬あかるく掲げたる
- 20 梨齧りつつ隅つこの下戸でゐる
- 21 いちじくのさみしき鳥の形かな
- 22 はつしぐれ都こんぶの薄ら甘
- 23 短日や指葉して神田駅
- 24 鯛焼のちよつと呉れよが斯程とは
- 25 吾の抱く葱を車中の誰も嗅ぐ
- 26 二三人跨ぎ蜜柑の箱浚ふ
- 27 火を慕ひ火を飽きそめて焚火果つ
- 28 ひげ少し描かれ降誕劇へ立つ
- 29 息白しかりそめの名に猫を呼び
- 30 河映すカメラに雪の当る音

- 1 はつなつの船首の影は波のなか
- 2 船底を波突き上ぐる帰省かな
- 3 船窓に島の若葉のせまりくる
- 4 夏の潮押し寄せてゐる防波堤
- 5 自転車を巖にもたせ夏怒濤
- 6 思春期の沖へ沖へと泳ぎゆく
- 7 潮風に髪乾かしつ実梅食ふ
- 8 先生の通ひくる島花蜜柑
- 9 氷水いづれは島を離るる子
- 10 十人のための校庭花梯梧
- 11 穴子裂く島の子の眼にかこまれて
- 12 夏つばめ高きところに鳥役場
- 13 橋脚に潮ぶつかつて花海桐
- 14 峰雲へ白波たてて救急艇
- 15 夕風や砂利満載のガット船
- 16 南風吹く島に一札研修医
- 17 十五より島を離れて夕螢
- 18 ほうたるのひかりのどこか濡れてゐる
- 19 螢火の這ひまはりゐるたなごころ
- 20 夏暁の漁港につどふ女たち
- 21 鍋に脚あまる大蛸茹でてをり
- 22 割烹着に皺ひとつなし祭まへ
- 23 ゐぬはずの父あらはるる祭鱧
- 24 潮満ちて星さわぎだす宵祭
- 25 菓売の宿下駄に来る祭かな
- 26 峰雲へ湯立の榊弧を描き
- 27 形代てふはかなきものを胸に撫で
- 28 甘酒につぎつぎ並び祭笛
- 29 にぎはひの短き島の夜店かな
- 30 夜光虫ふたたたび闇のめぐりくる

- 1 見てゐてと言はれ見てゐる春遊
- 2 タグ切つてあげる四月の銚かな
- 3 名前には菜の花の菜を入れようか
- 4 春潮や大まかに説く地動説
- 5 雲梯は虹立つかたち夏来る
- 6 口よりも大きく掬ふかき氷
- 7 水馬の脚に古池押すちから
- 8 弄られて固く仰け反る大蚯蚓
- 9 山羊の瞳の細き水平やませ来ぬ
- 10 飛び立てば二本の糸蜻蛉となりぬ
- 11 蝉生る夜によく磨く永久齒
- 12 景品で景品を指す夜店かな
- 13 薄闇にカットグラスを見失ふ
- 14 急かされてゐる玄関の水着子に
- 15 隕石の落ちゆく挿絵八月来
- 16 亀虫の白熱灯へ当たる音
- 17 委員らに異議無し背高泡立草
- 18 賢治忌の遙かに昏き地球影
- 19 秋晴の遊具の船の舵を取る
- 20 祈りから運動会の始まりぬ
- 21 初雪のことばかり書く手紙かな
- 22 冬晴へ振り抜く小さきドライバー
- 23 占ひの通りにポインセチア買ふ
- 24 ねんねこや男に乳の出ぬ乳首
- 25 スキー帽脱ぎてやさしき親となる
- 26 空瓶のラベルの貴族春の涙
- 27 子の前の枝垂桜を除けてやる
- 28 恋多き画家の自画像春の汗
- 29 眠る子とひゝなの客となりにけり
- 30 ふらこゝをもつとくと言はれつゝ

- 1 山頂の残り雪より夜の明くる
- 2 飛花落花竜に翼の在りし頃
- 3 有限の時間に石鱗玉溢す
- 4 卒業に立て掛けておく竹刀かな
- 5 風葬の瞳に鳥の帰り行く
- 6 師の流儀伝ふ足先下萌ゆる
- 7 耕して来世は土に生まれたし
- 8 神隠し在りし辺りを草むしり
- 9 嘶けるものも加はる田植歌
- 10 翡翠の光突き刺しては放す
- 11 歩き疲れて雲海の王に侍す
- 12 彷徨の民の夜へと火取虫
- 13 根の国の人肌ほどの冷し酒
- 14 隣人の夢の中なる水中花
- 15 学僧の足裏を愛でる草の花
- 16 大道へ続く径に盆の月
- 17 隧道を抜けて終戦日の暮るる
- 18 夭折の星の零れて竜胆に
- 19 語らざる身の上重くして踊る
- 20 筆跡を頼りに夜なべしてをりぬ
- 21 家族とふ楔の上に打つ砧
- 22 連山の最敬礼に神の旅
- 23 海水も賢者の背も瘦せにけり
- 24 生老病死を絡げて神楽とす
- 25 誰が為の正義でも無く冬薔薇
- 26 持ち主の亡き猟銃の冷えてをり
- 27 理想郷までの道のり息白し
- 28 九天も九地も捨てし帰り花
- 29 非常食数へ直して年の逝く
- 30 山祇に子の生まれたる水温む